Tsukuba Psychological Research
1998, **20**, 173-190

プライベート空間の心理的意味とその機能
ープライバシー研究の概観と新たなモデルの提出ー

筑波大学大学院(博)心理学研究科　泊　　真児
筑波大学心理学系　吉田　富二雄

Psychological meanings of private space and its functions:
A review of privacy research and proposal for new models

Shinji Tomari and Fujio Yoshida *(Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan)*

The first purpose of this paper is to review previous studies on privacy and to discuss problems with present privacy research. The second purpose is to attempt a functional analysis of private spaces and propose new models for private spaces. Privacy research has proceeded mainly as a measurement of orientation towards privacy or privacy preferences and examination of associated concepts (Marshall, 1972, 1974; Pedersen,1979; Iwata, 1987; Yoshida & Mizokami, 1996). Factor analytic studies identified nine types of privacy: solitude, free will, intimacy with friends, reserve,intimacy with family, seclusion, isolation, not neighboring,and anonymity. However, these 9 situations of privacy seemed different along social and physical environments in which they occured. Therefore,based on the findings of previous studies and the results of our study, we hypothesize that private places have 3 major functions and 7 sub categories:emotional release (tension reduction, change in one's mood, release from daily social roles and self-development), security (security of oneself, stability of self-concepts) and intellectual activity (concentrating on one's subject, self-focus).

Key words: privacy, private space, functions of private space, hypothetical models of private space.

はじめに

プライバシーという言葉は，19世紀末の米国でジャーナリズムによる私生活の暴露に悩まされた法律家が，法的な対抗手段として「プライバシー権」を提唱したことにより登場した．当初から権利として尊重され，今日，世界的に広く定着していることを考えると，プライバシーの確保には普遍的かつ重要な意味があると考えられる．しかし，プライバシー概念は，権利としては確立しているが，その内容や本質的な意義の解明は不問に付されたままとなっている．すなわち，「プライバシーの確保とは何か」，「人はなぜプライバシーの確保を必要とするのか」，そして「プライバシーの確保は人間にとってどのような心理的意味を有するのか」，といった心理学的側面からの検討は未だ不十分である．

そこで，本稿では，従来のプライバシー研究の概観からその課題を浮き彫りにし，プライベートな時間・空間の確保が持つ機能と心理的意味に焦点を当てる．そして，最終的には我々の生活空間をプライバシーの観点から構造化するモデルの提出を目的と

している．

1．プライバシーを研究することの意義

従来，プライバシー概念は法学・建築学・社会学等の様々な学際領域で扱われ，多くの学者が概念の定義を試みてきた(e.g.,Westin, 1967; Altman, 1975)が，依然として統一的な見解が存在しない(Newell, 1995)．一般的には，プライバシー概念は個人情報の保護という観点から捉えられている．しかし，病院の診察室や大部屋，災害時の避難所等ではプライバシーの欠如が，絶えずストレッサーの上位に挙げられている．また，プライバシーの欠如が心身症的なストレスと関連するという報告(Webb, 1978)や，母親の役割に拘束されることによるプライバシーの減少が，幸福感の低下をもたらすという報告(Collette, 1984)が，いずれも面接調査から得られている．さらに，プライバシー確保のための行動を有効に利用している学生は，大学環境への適応度が高いという調査研究(Vinsel, Brown, Altman, & Foss, 1980)等も見られる．その他にも，南極観測隊や宇宙ステーションのような閉鎖環境において，プライバシー確保の問題はクルーの心身の健康管理や環境への適応，ハイパフォーマンスの発揮，クルー相互の良好なコミュニケーション等を図る上で非常に重要な要因の1つであることが，初期の研究から指摘されている(e.g., Altman & Haythorn, 1967; Altman, Taylor, & Wheeler, 1971; Harrison, Sommer, Struthers, & Hoyt, 1986; Harrison, Caldwell, Struthers, & Clearwater, 1988; Harrison & Connors, 1990; Palinkas, 1990)．こうした実際的な問題について考慮する際には，プライバシー概念を情報的側面と時・空間的側面に分けて整理する必要があるのではないかと考えられる．そこで，本稿では時・空間的な側面から見たプライバシー概念に焦点を当て，「他者の目を気にする必要がなく自由に振る舞える自分固有の時間や空間」をプライベート空間と呼び，プライベート空間確保の意義について言及していく．

ところで，プライベート空間の確保が困難であるという問題は，上述のような特殊な状況のみに限定されるものではない．すなわち，多忙な生活スケジュールに追われている人や，乳幼児を抱えて親としての役割に拘束される母親は，プライベート空間が剥奪された状況にあると言えよう．また，他者からの強い期待と役割を担う人々や，住人が互いにうわさ話をしあうような狭いコミュニティでは，プライベート空間の確保は容易でなく，一種の閉鎖環境に置かれていると見ることも可能であろう．

このように，プライベート空間の研究は単なる概念上の問題ではなく，ライフスタイルの改善や環境デザインへの応用，ストレスコーピングの問題等へと展開する重要な研究課題であると言えよう．それにも関わらず，本邦ではプライバシーに関する心理学的研究の蓄積が浅く，ようやく最近から研究が行われ始めたという現状にある(岩田，1987；吉田・溝上，1996；泊・吉田，1997)．

そこで，以下ではプライバシーに関する従来の研究を概観しながらその課題を浮き彫りにし，プライベート空間の機能に焦点を当てて議論していくことにする．

2．従来のプライバシー研究

「プライバシー」概念は，権利として提唱されてからの1世紀程度の歴史しか持たないが，プライバシー概念の原型は，間接的にではあるが“公と私”，“パブリックとプライベート”の区分に関する議論の中で，既に紀元前3世紀頃から登場している(Moore, 1984)．その意味では，古くて新しい問題であると同時に，人と人，人と社会との関係を見る際の基本的な枠組みの1つであるとも言えよう．従来，プライバシーの研究は様々な学問領域でなされているが，ここでは法・政治学，社会学，建築学，そして心理学の4領域における主な見解について取り上げていくことにする．

2.1．法・政治学領域におけるプライバシー研究

Warren & Brandeis(1890)による『The Right to Privacy』と題する論文の発表が，あらゆる学問分野でプライバシー研究がなされる契機を創りだしたと言える．この論文では“ひとりにしておいてもらう権利(the right to be let alone)”という概念を引用してプライバシー権が論じられているが，1960年代以降，米国を中心に個人情報がコンピューター処理されるようになってからは，個人情報を自らコントロールできる権利として捉えられている．

Westin(1967)は，プライバシーを“個人，集団，又は組織が自分自身に関する情報を，いつ，どのように，また，どの程度他者に伝達するかについて自ら決定できるという権利である”として，自己情報の統制という側面からプライバシー概念を定義している．また，Westin(1967)はこの定義に加え，“個人と社会参加の関係という観点から見ると，プライバシーは物理的あるいは心理的手段を通じて個人が一般社会から自発的かつ一時的に引きこもることである”とも述べている．そして，このような観点から，プライバシーが確保されている基本的状態を4類型に整理している．それらは，“独居(solitude)”

(個人が集団から離脱して他者の観察から自由になる状態)，“親密さ(intimacy)”(個人が2人もしくは2人以上の人々との間で親密で，リラックスし，かつ率直になれる人間関係の場を持つ状態)，“匿名性(anonymity)”(個人が公共の場所や公的役割を演じる状況にあるが，個人として識別されたり監視されたりしない状態)，“留保(reserve)”(他者の予期せぬ侵入に対して心理的な障壁を創り出す状態であり，自己開示の統制という形態をとる)である．このように，Westin(1967)のプライバシー論は，プライバシー概念に関する体系的かつ緻密な分析が行われていることから，法・政治学領域のみならず，他の学問領域のプライバシー研究にも多大な影響を与えることとなった．

ところで，本邦では新聞界を中心に早くからプライバシーの概念が注目され，1929年の山崎光次郎氏による『新聞道徳論』の中で，“内秘権”という言葉でこのプライバシー権が紹介されたのがその始まりだとされている(村上，1996)．しかし，実質的なプライバシー研究としては，三島由紀夫氏による小説『宴のあと』をめぐる初めてのプライバシー侵害訴訟が提起された1961年が，その始まりだと言えるだろう．

今日では，プライバシーの侵害のみを単独に主張する訴訟は少なく，判例の多くが名誉毀損事件として処理され，最高裁の判例からもプライバシーの言葉が消えている(村上，1996)というのが現状のようである．しかし，電子メディアの飛躍的な発展と相まって，プライバシーの問題は個人情報の保護と情報公開(知る権利)のせめぎあいの中で，極めて重要な検討課題であるという見解に疑いの余地はないであろう．

以上のように，法・政治学領域ではプライバシーが権利として定着しているため，プライバシーの確保が重要であるとする根拠を厳密に追求する姿勢は見られない．ただ確実なことは，プライバシーの保護，すなわち，「ひとりにしておいてもらう」や「私生活をみだりに公開されない」ということが，権利として尊重されるべきだという共通認識を獲得しているという事実の存在である．つまり，それは，プライバシーの確保には人間にとって重要かつ普遍的な意義が存在していることを，暗に示唆していることに他ならないと考えられるからである．

2.2．社会学領域におけるプライバシー研究

プライバシーの概念に関する社会学の独自な分析の視点はあまり見られないが，“公と私”に関する議論(三戸，1976；安永，1976)やGoffman(1959)の“Front-region-Back-region”の区分では，それぞれが“Public と Private”に比較対照される概念として語られている．特に，Goffman(1959)の言う“Back-region”は，社会生活という表舞台での役割から解放されてリラックスできる“裏舞台”を意味しており，本稿におけるプライベート空間の概念に相当するものと捉えられる．また，『孤独な群衆』(Riesman, 1950　加藤訳，1964)においては，他者志向型社会では他人に対する感受性が重視されプライバシー意識も希薄であるが，内部志向型社会では内的な指針への感受性が重視され自立した個人としてのプライバシーが尊重されることを述べている．こうした議論の中では，「私」の領域や「Private」の領域はある程度固定化された，実体的な概念のように述べられている．しかし，近年では，片桐(1996)が象徴的相互作用論の観点から，プライバシーを「他者との関係性の中で維持・設定される状況依存的な領域である」ことを述べ，プライバシーは実体的な概念ではなく社会的に構成されることを指摘している．また，森田(1991，1993)は不登校問題と関連づけながら，学校という社会空間の中に自分らしさや生きることの意味を感じとることができる空間が必要であることを指摘し，これを“プライベートスペース”と呼んでいる．ここで言うところのプライベートスペースは，論文中に引用されている記述から考えると，Cohen & Taylor(1976；石黒訳，1984)の“離脱の通路”，すなわち“日常生活のルーティン化された現実の中に埋め込まれた相対的に自由な空間”のことを指していると考えられる．ただ，森田の場合，プライベートスペースであるか否かを規定する要因として教師の目を挙げているが，その目がどのような性質のものかに関しては明確な説明を行っていない．したがって，離脱の通路の構成用件，言い換えれば，“公と私”，“パブリックとプライベート”という性質を規定する要因の整理までには至っていないと言えよう．

以上のように，社会学におけるプライバシー研究は独自の定義や理論を打ち出すほどには成熟していないように思われるが，しかし，基本的なテーマとしての位置付けは確立していると考えてよいだろう．

2.3．建築学領域におけるプライバシー研究

建築学の領域では，集合住宅や公共施設のデザインにおいて，プライバシーの確保が重要な構成要素であることが指摘されてきた．例えば，Sommer(1969；穐山訳，1972)は図書館等の公共施設において，人が侵入者に対して自らのプライバシーを防衛するために行う空間行動についてフィールド実験や

調査で検討している．すなわち，プライバシーを消極的に防衛する空間行動の場合には，物を置いたりパーソナルスペースを確保する等の間接的な方略を用いるが，積極的防衛反応の場合は大きなテーブルの中央に着席したり，ドアに相対して着席する等の傾向があることを示している．

こうして，個人の欲求や感情，社会的相互作用の程度等を考慮した空間配置の問題が検討されるようになってきたが，中でもプライバシーの確保は基本的な要因の１つであると言えよう．三輪・大澤(1979)は，“１つの住宅の中，あるいは家族の中にあって，個人としての世界を大切にするという意味で，個人個人の生活空間を独立して持ち得るように間取りを考える必要がある”ことを述べており，また，『建築学大系 27 集団住宅』(1978)によれば，“住宅が集合化することによって，各戸の独立性は失われやすいので，プライバシーの保護は設計上の大きな問題となる”ことが指摘されている．近年では，高度経済成長期以降の子ども部屋の普及を受けて，子ども部屋あるいは個室の所有が子どもの自立に与える影響に関する実態調査等が行われている(北浦，1988；北浦・西岡・木村・萩原・若井，1991；中島，1993，1994)．これらの研究からは，概ね，子ども部屋を与えることが子どもの生活面及び精神面の自立を促進するという結果が得られている．ただ，こうした研究では，主に自室というプライベート空間しか検討しておらず，自室がない人や自室以外のプライベート空間については考慮されていないことも指摘しておきたい．いずれにしても，居住環境のデザインを行う上で，プライバシーの確保は重要な要因であると言えるだろう．

2.4．プライバシーに関する心理学的研究

心理学領域におけるプライバシー研究は1970年代から米国を中心に行われてきたが，その背景には政治学者Westin(1967)による『Privacy and Freedom』という著作の影響が存在したと言えるだろう．

Altman(1975)は，Westin(1967)のプライバシー論の影響を受けつつも，あくまで心理学的立場から独自のプライバシー論を展開している．すなわち，プライバシーは“自己，又は自己の属する集団への接近に対する選択的な統制である”と定義され(Altman, 1975)，対人関係の調整メカニズムとして捉えられている．Altman(1977)は Gregor(1970, 1974)によるブラジルの少数民族を対象とした文化人類学的研究を例に，共同生活によってプライバシーがほとんど持てない文化においては，村の周辺にプライベート空間を確保できるような小道や空き地が用意されていたり，数日間村を離れる行動が許容されていることを述べ，プライバシーの確保が文化を越えて普遍的に観察される現象であることを指摘している．その後，Patterson & Chiswick(1981)のボルネオの少数民族を対象とした研究でも，長屋生活で物理的にプライバシーを確保することが困難な彼らの文化では，例えば，長屋が日中は公共の空間として使われ夜にはプライベートな空間に移行することや，喪中の時や宗教的な儀式の時には見知らぬ人に対して長屋が閉じられる等のように，社会的なルールによってプライバシーを確保するメカニズムが存在することを見出している．

こうして，心理学では Westin(1967)や Altman(1975)によるプライバシー論をベースとして，様々なプライバシー研究が行われてきたが，それらの諸研究を内容別に10領域に分類し整理したものがTable1である．Table1より，プライバシー研究は，まず1．のプライバシー概念の解明や理論的検討の問題に始まり(e.g., Bates, 1964; Kelvin, 1973)，プライバシー志向性尺度の開発(e.g., Marshall, 1972, 1974; Pedersen, 1979)を契機として研究領域が次第に拡大していった．その中のいくつかの研究を取り上げると，Weinstein(1982)や Pedersen(1994)の研究では，プライバシーの欲求と教室場面におけるプライバシー確保のための座席選択行動が観察されている．その結果，プライバシーの欲求が高い者はプライバシーを確保できるブースや教室の後方の座席を選択することが明らかにされている．また，最近では現実場面への応用的研究が盛んであるが，Sundstrom, Town, Brown, Forman, & McGee(1982)や Block & Stokes(1989)のオフィス環境の研究では，物理的な囲いがあるプライベートオフィスの従業員の方がオフィスへの満足度が高いことが示され，Crouch & Nimran(1989)の調査研究では，仕事のパフォーマンスを抑制する要因として，プライベート空間が確保できないことを挙げる比率が，全回答中の40%を上回っていたことが報告されている．

パーソナリティとの関係を検討した研究では，プライバシー志向性と抑うつ性，回帰性傾向，思考的内向は正の相関があるという研究(Pedersen, 1982b；岩田，1987)と，男女別に検討すると「家族との親密性」志向が高い女性は自己統制力，責任感，幸福感，支配性，女性性が高いという研究結果(Pedersen, 1987a)が報告されている．すなわち，これらの結果はプライバシー志向性に性差が存在すること(Pedersen, 1987b)や，志向性の高低だけから一概にパーソナリティや社会的適応等との関係を結論づけられないことを示唆していると思われる．ま

た，その他には，情報的なプライバシーを扱った研究として，情報プライバシーの保護に価値を置く人ほど，プライバシーの侵害に敏感であるという調査研究(Stone,1986)や面接調査の報告(Stone, Gueutal, Gardner, & McClure, 1983)等が見られる．

さて，以下の2.5．では，Table 1に整理された研究領域の中から，特に，従来のプライバシー研究の中で中軸をなしているプライバシー志向性尺度に関わる研究を概観していくことにする．

2.5．プライバシー志向性研究

心理学領域では，プライバシー概念を選好ないし志向性と捉え，2.1．で述べたWestin(1967)によるプライバシーの4類型の提起を受ける形で，Marshall(1972,1974)とPedersen(1979)が因子分析を用いた実証研究を行っている．Marshall(1972, 1974)は環境心理学の立場から，大学生への面接から得られたアイディアと，Westin(1967)やPastalan(1970)による理論的な考察をもとに，56項目からなるプライバシー選好尺度を作成している．その結果，Westin(1967)の4類型である“独居”，“親密さ”，“匿名性”，“留保”とともに，“近所付き合いしないこと(not neighboring)”と“閑居(seclusion)”という計6因子を抽出している．また，Pedersen(1979)の研究では，Altman(1975)の定義に基づきWestin(1967)の4分類を参考にして，96項目を構成し第1調査を行っている．その結果，6因子を抽出し，さらに第2調査では，各因子5項目づつの計30項目を構成して同様の6因子を確認している．すなわち，Pedersen の尺度では，Marshall(1972, 1974)と同様の“留保”，“独居”，“匿名性”の他に，“家族との親密さ(intimacy with family)”と“友人との親密さ(intimacy with friends)”という2種類の“親密さ”因子が抽出され，さらに“孤立(isolation)”という因子も抽出されている．本邦では，まず岩田(1987)がAltman(1975)の定義に基づいてプライバシー志向性尺度を

Table 1　プライバシー(Privacy)研究の主要な領域の概観

研究の分類に用いたカテゴリー	主要な研究と論文の出版年度
1．プライバシー概念の解明と理論的検討	Bates(1964), Schwartz(1968), Pastalan(1970), Kelvin(1973), Altman(1976), Berscheid(1977), Margulis(1977), Foddy(1984), Iwata(1988)
2．プライバシー志向性尺度の開発	Marshall(1972, 1974), Hunter, Grinnell, & Blanchard(1978), Pedersen(1979), 岩田(1987), 吉田・溝上(1996), Craddock(1997)
3．プライバシー概念と類似概念との比較	Altman(1975), Edney & Buda(1976), Esser(1976), Warren & Laslett(1977), Weiss(1987)
4．プライバシー志向性とパーソナリティとの関連の検討	Marshall(1974), Pedersen(1982b, 1987a, 1988), 岩田(1987)
5．プライバシー志向性の地域差・文化差及び性差の検討	Traver(1984), Pedersen(1987b), Pedersen & Frances (1990), Rustemli & Kokdemir(1993)
6．プライバシーを確保するための行動	Altman, Taylor & Wheeler(1971), Taylor & Ferguson(1980), Patterson & Chiswick(1981), Weinstein(1982), Pedersen(1994)
7．プライバシー調整メカニズムの検討	Altman(1975, 1977), Altman & Chemers(1980), Haggard & Werner(1990), Werner & Haggard(1992), Brown(1992), Harris et al.(1995)
8．プライバシーの機能の検討	Westin(1967), Vinsel et al.(1980), Hammitt(1982),Hammitt & Brown(1984), Hammitt & Madden(1989), Priest & Bugg(1991), Pedersen(1997)
9．オフィスにおけるプライバシーの検討	Sundstrom et al.(1982), Block & Stokes(1989), Crouch & Nimran(1989), Duvall- Early & Benedict(1992), O'Neill(1994)
10．その他のプライバシー研究	Derlega & Chaikin(1977), Webb(1978), Tolchinsky et al.(1981), Stone et al.(1983), Stone(1986), Newell(1994, 1995)

作成している(付録1参照). 岩田(1987)は日本人大学生を対象にプライバシー概念に関する予備研究を行った結果, "他人に知られたくないことの非公開", "自由", "独居"をプライバシーの主要次元と考えて, 15項目からなる尺度を構成し本調査を行った. その結果, "独居", "精神生活の非公開", "病気・身体的欠陥の非公開"という3因子が抽出されている. 最近では, 吉田・溝上(1996)が従来のプライバシー志向性尺度を翻訳して包括的な再検討を行っている(付録2参照). すなわち, Marshall(1972, 1974), Pedersen(1979), 岩田(1987)の尺度をベースに, 日本人の行動やプライバシー状況を考慮した独自の項目を付加して尺度を構成し, 最終的には21項目からなる尺度を採用している. つまり, 吉田・溝上(1996)の尺度では, "匿名性"因子が抽出されなかった以外は先行研究と同様の7因子: "独居", "自由意志(free will)", "友人との親密性", "遠慮期待(reserve)", "家族との親密性", "閑居", "隔離(isolation)"からなるプライバシー状況を抽出している.

このように, プライバシー志向性に関する先行研究はプライバシー概念を実証研究の俎上に載せたという点と, プライバシーの確保された状況が多次元的な性質を持つことを明らかにしたという点で評価しうるであろう. 実際に, プライバシー志向性尺度の開発によって研究領域が拡大していると考えられるからである. しかしながら, こうしたプライバシー志向性をめぐる諸研究は, プライバシーが確保される現象形態の解明や個人特性との関連の検討に終始しており, それらの知見が内包する意味に関しての理論的な説明力を欠いた状態にあるように見える. すなわち, プライバシーの確保が持つ心理的意味や機能という側面が未整理であるため, 得られた知見の解釈やプライバシー研究の展望が困難な状態をきたしているように思われるのである.

さらに具体的に考えると, 例えば, 先行研究で抽出されている計9つのプライバシー状況(独居, 閑居, 孤立(隔離), 自由意志, 友人との親密性, 家族との親密性, 留保(遠慮期待), 近所付き合いしないこと, 匿名性)は, 各々の状況を構成する社会的性質(1人だけの状況, 小集団状況, 匿名的状況)や空間的性質(専有空間, 共有空間, 公共空間)が非常に多様性を帯びている. すなわち, 例えば, 独居, 閑居, 隔離等は, 現象的に見れば他者の観察から離脱して自分だけの時間や空間を確保している状態という点では共通性があるが, 上述の観点からすると, これら3つのプライベート空間の機能的な差異を検討する必要性があると考えられる. 極端な例で言えば, 独居できるプライベート空間と匿名的なプライベート空間とでは, その空間で行われる活動や心理的な意味がかなり異なった様相を呈していることが推察されるのである. しかし, こうしたプライベート空間相互の関係がどのような構造を成し, かつどのような意味を有しているのかについてはこれまでほとんど言及されてこなかった. こうしたことから, 一口にプライバシー状況の確保と言っても, それが果たす機能や心理的意味は必ずしも一様であるとは考えにくく, それゆえにプライベート空間の相互関係や心理的意味を検討することが必要だと考えるのである.

よって, 以下では, プライバシーないしプライベート空間の確保が持つ機能という点に言及している先行研究を概観し, プライベート空間の機能に関する知見を整理することとする.

3. プライバシーの機能に関する先行研究

先行研究ではプライバシーもしくはプライベート空間の確保が持つ機能的側面に言及しているのはごくわずかであり, 実証研究となると極めて少数にとどまる. 以下では, Westin(1967)のプライバシーの機能に関する分類, レジャー研究, プライバシー剥奪状況に関する研究およびその他の研究等の知見を順に紹介していくことにする.

3.1. Westin(1967)のプライバシーの機能の4分類

プライバシー確保の機能に関しては, Westin(1967)の『Privacy and Freedom』における, プライバシー確保の機能の4分類がおそらく最初のまとまった議論であると思われる. Westin(1967)はプライバシーの確保には4つの機能があるとし, 1. 個人の自律性(他者による支配や操作を受けずに, 自己の独立性やアイデンティティの感覚を発達させる機能), 2. 情緒的解放(社会的な役割を演じることから人をリラックスさせ, 不安やストレスからの保護, 休息を提供する機能), 3. 自己評価(自分の経験, 日常生活の出来事や様々な情報を処理し, 将来の行動に向けての計画を立てる機会を提供する機能), 4. 制限されかつ保護されたコミュニケーション(自分が信頼する配偶者, 家族, 友人等と秘密や親密性を共有するための機会を提供し, また様々な役割関係にある人々との精神的な距離の境界を設定する機能)を挙げている. Westin(1967)の分類したこれらの4機能は, 常識的でもっともらしい分類であるように思われる. しかしながら, これらの4機能は実証的な検討を受けて洗練されてきた分類というわけではなく, あくまでWestin自身が洞察した個人的見解が述べられているにしか過ぎない. その

後も，プライバシー研究の領域が拡大する中にあって，なぜかこの機能の問題に関しては長らく実証的に検討されてこなかった．

3.2．レジャー研究

上述したとおり，Westin(1967)の分類した4機能に関して実証研究レベルでの関心はあまり向けてこられず，1980年代に入ってようやく，レジャー研究の領域で実証的な検討の試みがなされた．Hammitt(1982)は，自然環境の中では独りになれる状態(Wilderness Solitude)が自然体験の重要な構成要素であることを指摘しているが，これは自然環境におけるプライベート空間のことを指すと考えることができる．こうした観点から，その後，自然環境の想定のもとにWestin(1967)によるプライバシーの4機能の有効性が検討されている(Hammitt & Brown, 1984; Priest & Bugg, 1991)．Hammitt & Brown(1984)の研究では，山歩きの経験がある米国人学生を対象として，Westinの挙げた4機能に基づいて計24項目が構成され，各項目内容の重要度の評定をさせている．また，Priest & Bugg(1991)の研究ではHammitt & Brown(1984)の研究の追試を行うために，オーストラリア人学生を対象に同様の質問紙を用いた研究が行われている．両研究とも，因子分析の結果は概ねWestin(1967)の分類を支持するものであり，自然環境がプライベート空間の1つと見なせることを示していると考えられる．しかし，両研究とも調査目的の性格上，調査対象者が特殊な範囲に限定されているということや，自然環境以外の多様なプライベート空間が考慮されていないこと，重要度のみの評定のため実際のプライベート空間がどの程度確保され，どの程度機能が充たされているかが不明である等の問題点を指摘することができる．したがって，プライベート空間を，人それぞれに異なる様相を示す生活空間も視野に入れて考える場合には，自然環境のみをプライベート空間として考えるのは限定的すぎるということになろう．

3.3．プライバシー剥奪状況に関する研究

3.1．と3.2．では，プライバシーの確保が持つ機能について先行研究の知見を紹介してきたが，ここでは人間がプライバシーを剥奪された状況に置かれた場合に，どのような影響が生じるかという逆の立場から，心理的意味や機能の問題を検討していくことにする．そこで，以下では，プライバシー剥奪状況の例として，社会生活から隔離された極地環境や宇宙ステーション等の閉鎖環境における研究の知見を紹介していくことにする．

さて，極地環境や宇宙ステーション等の施設は物理的・経済的要因を始めとする様々な制約がかかるために，そこで生活するクルー達の居住空間も極度に制限されたものになっている．すなわち，初期の頃はクルーの生存だけを考慮した必要最低限の環境であり，プライバシーや娯楽活動の制限された狭小な空間に，何名ものクルーが共同生活をするような状態にあった．それゆえに，こうした閉鎖環境で生活するクルー達にどのような問題が生じるかに関して，従来から調査やシミュレーション実験等が行われてきた．例えば，1966年～1971年にかけて行われたAltmanやHaythornを中心とする一連の研究では，海軍の兵士のペアを8～10日間小さな部屋に隔離して生活させ，ストレス反応や空間行動，作業のパフォーマンス等を測定している．その結果，プライバシーの無い群は有り群と比べて縄張り行動の増加，主観的ストレスの高まり，社会的相互作用の減少及び社会的引きこもり等が見られた(e.g., Altman & Haythorn, 1967; Altman, Taylor., & Wheeler, 1971)．こうした知見を経て，その後は，NASAの研究報告書にプライバシーの確保という観点から宇宙ステーションのデザインを検討した報告がなされている(Harrison et al., 1986; Harrison et al., 1988)．

Harrison et al.(1986)では，クルー間の対人接触を減少又は制限してプライバシーを確保することにより，以下のような4つの機能がもたらされると述べている．それらは，(1)個人的活動：複雑な思考や問題解決能力を引き出すために高度な集中力を必要とする任務では，他者との接触の制限が個人の機能を高める，(2)覚醒水準の統制：プライバシーの確保によって，常に他者存在の影響に曝されることによる覚醒水準の高まりを排除し，休息と回復を促進する，(3)自己管理：プライバシーの確保によって，他者からの知覚や反応に対する懸念を緩和し，他のクルーへの怒りや不満を吐き出す機会を提供することで対人関係の問題を避ける，(4)制限されかつ保護されたコミュニケーション：プライバシーの確保によって，集団内のサブグループのクルー同士が他のクルー達の潜在的な反応を考慮すること無しに，率直なコミュニケーションを交わすことができる，である．

上述した機能を実現するための方策として，Harrison et al.(1988)の報告書では，活動領域の区分，仕切りの利用，空調や騒音低減システムの導入等，ハード面を中心に60以上の具体的な提言がなされている．しかし，現代の極地の生活環境が非常に改善されている(Mocellin, Suedfeld, Bernadelz, & Barbarito, 1991)一方で，宇宙ステーションの場合は物理的・経済的な諸々の制約が依然として存在するため，ハード面からの対処は難しいと考えられる．し

かも，クルー達は，クルー相互のプライバシーの確保以外に，地上の管制室に対してのプライバシーの確保も必要である．なぜなら，クルー達は地上の管制室から常時あらゆる活動をモニターされ，かつ非常に強い役割期待を担っていることによって，かなりの自己抑制を強いられていると考えられるからである．したがって，自己の欲求や鬱積した感情を解放できるような心理的・仮想的なプライベート空間を確保する方向も検討する必要があるだろう．

以上で概観したように，極地環境や宇宙ステーション等のプライバシーが剥奪されたような状況では，そこで生活する人々の心身の健康維持やパフォーマンスの向上，良好な対人関係の形成にとって，プライベート空間の確保がより一層重要な問題であることが分かるであろう．ただ，本稿の冒頭にも述べたように，これらの知見は決して特殊な状況に限定されるものではなく，周囲からの強い役割期待を担っている人々や，育児に拘束される母親，狭いコミュニティの住人など，一般の人々が抱える日常生活上のストレスの問題にも十分適用しうるものとして考えることが可能である．

3.4．プライバシーの機能に関するその他の研究

プライバシーの機能に関して多少とも言及している知見を紹介すると，以下のような研究が挙げられる．

Brown(1992)の研究では，大学内の施設に8週間学生を共同生活させて，その内の第3週目の1週間について経験サンプリング法(以下，ESMと表記)という手法を用いた研究を行っている．ESMとは，電子機器を用いて毎日ランダムな時刻に規定の回数だけ信号を送り，被験者は信号を受け取ると，その直前の状況やムードについて自己報告するという手法である．この研究の結果，被験者達は頻繁に独居の状態を経験しており，ひどいムードを経験しているときには独居の状態への満足度が高いことから，プライベート空間はエネルギー補充のための避難所として機能しているのではないかと示唆している．また，Newell(1994)の研究では，プライバシーを確保したいと思うときの状況について自由記述調査を実施している．その結果，悩みのあるときや課題志向的な活動をするときにプライベート空間が利用され，プライベート空間を確保できた者の8割は，確保による感情状態の改善を報告している．近年では，環境心理学の領域で健康回復的・治療的(restorative or therapeutic)環境をテーマとした研究が増加しており，そうした性質を持つお気に入りの場所や自然環境の条件として，プライベートな状態が重要であることが示されている(e.g., Korpela, 1989, 1991, 1992; Francis & Cooper, 1991).

上記の諸研究は，プライバシーの機能という側面を直接的に問題にした研究ではないが，最近になって，Pedersen(1997)が直接的にプライバシーの機能という側面に焦点を当てた論文を発表している．Pedersen(1997)の研究では，Westin(1967)等のプライバシーの機能に関する先行研究の知見から，例えば，“自分の情動を自由に表現できる(Express my emotions freely)”や“自己発見をする(Discover who I am)”等の20項目からなるプライバシー利用目的のリストを作成し，Pedersen(1979)の6つのプライバシー状況のそれぞれが各機能を充たすのにどの程度利用されるかについて，5件法で利用頻度の評定をさせている．その回答を因子分析した結果，プライバシーの確保には“熟考(contemplation)”，“自律性(autonomy)”，“元気回復(rejuvenation)”，“打ち明け話(confiding)”，“創造性(creativity)”，“承認されない消費行動(disapproved consumptions)”，“修復(recovery)”，“カタルシス(catharsis)”，“隠匿(concealment)”，“多機能(multi function)”という合計10の機能があることが見出されている．しかし，Pedersen(1997)の用いたプライバシーの機能は因子分析によって抽出された機能の因子を羅列している印象が拭えず，各プライベート空間の性質の差違と諸機能の対応関係について，論理的に構造化されていないように思われる．つまり，プライベート空間の各状況に共通する機能と状況特殊的な機能とがほとんど整理されておらず，機能間の相互関係の検討も不十分である．それゆえに，あるプライベート空間でなぜ特定の複数の機能が充たされるのか，そして，ある機能はなぜ特定のプライベート空間と対応するのかに関する考察が弱いように感じられる．

以上で概観してきたように，プライベート空間の諸機能は包括的に整理されていないため，仮にまとめるとすれば，プライベート空間には「自律性の機能」，「元気回復の機能」，「親密なコミュニケーションの機能」，「情緒的解放の機能」，「知的活動の場の提供機能」ということになるであろう．しかし，実際にはこれらの知見は整理されておらず，様々な機能が混在しているように思われる．したがって，プライベート空間の機能を包括的に整理するモデルが必要であると考える．

先行研究では，プライベート空間の確保の際の目的や状況はほとんど検討されていないが，プライベート空間の機能について問うということは，すなわち，人はどのような目的や先行条件に基づいてプライベート空間を確保するのかということを問うことに他ならない．そこで4．では，プライベート空

間のモデルの提出に向けて，プライベート空間の機能を整理・分類する基礎資料の収集のために行った調査について報告する．

4．プライベート空間の機能に関する調査

目的

プライベート空間の機能を整理・分類するための基礎資料となる事例の収集。

方法

調査対象　国立T大学生及び大学院生(男子17名，女子27名，計44名)．

調査内容　プライベート空間を確保する際の目的的，状況的な要因を整理するため，(1)何をしている(したい)時に，プライベートな時間や空間を確保しているか，(2)プライベートな時間や空間をどのような場所で確保しているか，(3)そのことにどのような利点(機能)があるか，という設問を設けた自由記述形式の調査である．

結果と考察

調査によって得られた(1)から(3)の回答を，心理学専攻の大学院生の協力を得てKJ法により分類した結果を，それぞれTable 2～Table 4に示した．

Table 2によると，プライベートな時間・空間を確保するときの目的(状況)は，最終的に5つのカテゴリーにまとめられた．それらは，1．知的・課題志向的活動，2．休息・自己内省的な活動，3．身

Table 2　プライベートな時間・空間を確保する時の目的(状況)の分類結果

カテゴリーの名称と記述の具体例	記述の数	構成比(%)
1．知的・課題志向的活動	27	35.1
自分の考えをまとめたいとき	8	10.4
読書をしている(したい)とき	8	10.4
勉強・研究をしているとき	6	7.8
自分に課せられた仕事をしている(したい)とき	5	6.5
2．休息・自己内省的な活動	19	24.7
休息・睡眠をとりたいとき	9	11.7
考え事をしたいとき	3	3.9
リラックスしたいとき	2	2.6
精神的に疲れたとき	2	2.6
混乱しているとき	1	1.3
ボーッとしていたいとき	1	1.3
悩みに対し自分なりの結論を出したいとき	1	1.3
3．身体・生理的な活動	13	16.9
排泄行為をするとき	7	9.1
入浴するとき	2	2.6
性行為をするとき	2	2.6
身だしなみを整える(整えたい)とき	1	1.3
泣くとき	1	1.3
4．自己表現・自己表出の活動	9	11.6
手紙や日記を書くとき歌を歌うとき	5	6.5
歌を歌うとき	1	1.3
絵を描くとき	1	1.3
自信のないことをするとき	1	1.3
親しい人と電話をするとき	1	1.3
5．内発的な動機による活動	9	11.6
趣味の時間(映画，音楽の鑑賞)	5	6.5
趣味や関心に惹かれて行動するとき	1	1.3
職場から離れて関係者の目の届かない所にいる時	1	1.3
趣味に熱中・集中したいとき	1	1.3
自分のための活動をしたいとき	1	1.3
計	77	99.9

※四捨五入の関係上，構成比の合計は100%にならない。

Table 3　プライベートな時間・空間を確保するための場所について

カテゴリーの名称と記述の具体例	記述の数	構成比(%)
1．閉鎖的な空間のカテゴリー	43	78.2
自分の部屋(個室，ゼミ室などを含む)	26	47.3
トイレ	8	14.5
風呂場	3	5.5
図書館	2	3.6
人の出入りが少ない場所	2	3.6
人のいないところ	1	1.8
壁の近くや教室の隅	1	1.8
2．開放的な空間のカテゴリー	12	21.8
公園	4	7.3
くつろげる静かな場所(山など)	3	5.5
混雑していない映画館	2	3.6
東京などの都会	1	1.8
喫茶店	1	1.8
電車の車内	1	1.8
計	55	99.9

※四捨五入により構成比の合計は100％にならない。

Table 4　プライベートな時間・空間の確保の機能(利点)についての分類結果

カテゴリーの名称と記述の具体例	記述の数	構成比(%)
1．安らぎを提供する機能	34	45.3
リフレッシュできる	7	9.3
安心感がある	6	8.0
気楽である	5	6.7
気が休まる	4	5.3
リラックスできる	3	4.0
休息できる	3	4.0
ストレス解消	2	2.7
ほっとする	1	1.3
スカッとしたり楽しい気分になったりできる	1	1.3
深く考えたり落ち込んだりすることなく生活していける	1	1.3
何でも話せる	1	1.3
2．集中力・作業能率を高める機能	22	29.3
集中できる	11	14.7
落ちついて物事ができる	5	6.7
作業能率の向上	2	2.7
じっくり考えることができる	2	2.7
他者からの刺激を低減し，集中できる	1	1.3
自分なりの考えをまとめることができ，問題解決に一歩近づく	1	1.3
3．自由な活動のための機会を提供する機能	19	25.3
自由に振る舞える	4	5.3
自分の心に向き合える	3	4.0
自分を取り戻せる	2	2.7
自分を見つめることで自己理解が可能になる	2	2.7
自分を確かめることができる	1	1.3
羞恥心の保護	1	1.3
自分一人で処理できる	1	1.3
自分だけの価値観が通せる	1	1.3
自分のやりたいことが達成できる	1	1.3
試行錯誤している姿を見られないで済む	1	1.3
他者からの評価が気にならない	1	1.3
自分だけの世界に入っていける	1	1.3
計	75	99.9

※四捨五入の関係上，構成比の合計は100％にならない。

体・生理的な活動，4．自己表現・自己表出の活動，5．内発的な動機による活動と命名した．次に，Table 3より，プライベートな時間・空間を確保するための場所については，自分の部屋等を含む1．閉鎖的な空間のカテゴリーと，公園等を含む2．開放的な空間のカテゴリーとに分類された．最後に，Table 4のプライベートな時間・空間を確保することの利点(機能)に関しては，リフレッシュできる等をその主な内容とする1．安らぎを提供する機能と，集中できる等を主な内容とする2．集中力・作業能率を高める機能，そして，自由に振る舞える等を主な内容とする3．自由な活動のための機会を提供する機能，という3つのカテゴリーにまとめられた．

既に指摘したとおり，先行研究では，プライベート空間における活動やその利点を直接に検討したものはほとんどなかったが，上記の結果は，プライベート空間が目的的に利用され，かつ特有な機能を有していることを示すものと言えよう．

5．プライベート空間の機能に関する仮説的なモデルの提出

さて，3．では，プライバシー研究を豊かに展開するために，従来のプライバシー志向性研究を離れてプライベート空間の機能という観点を概観した．すなわち，Westin(1967)のプライバシーの4分類，レジャー研究，プライバシー剥奪状況の研究，プライバシーの機能に関するその他の研究等の別々の研究知見を概観し，筆者達なりにプライベート空間の機能を整理した．また，4．ではプライベート空間の機能を包括的に整理するために実施した調査の結果について報告した．そこで，これらの知見をもとに，この5．では本稿の最終目的であるプライベート空間の機能に関するモデルの提出を試みる．Fig. 1はプライベート空間の機能を概念的な類似性をもとに整理・分類したものである．すなわち、プライベート空間は大別すると「情緒的解放」，「保全性」，「知的活動」という3機能に区別される．さらに各機能はそれぞれが下位分類を持ち，「情緒的解放」では心身の休息を特徴とする緊張解消と，趣味の活動や情動の解放等を特徴とする気分転換，さらに，役割から離れた別の自分を積極的に開発することを特徴とする日常的役割からの解放と自己開発という3機能を含んでいる．次に，「保全性」は自己情報の統制を特徴とする自己保全と，親密な人との率直なコミュニケーションを特徴とする自己概念の安定という2つの機能を含む．最後に，「知的活動」には，集中力を必要とする仕事や思考を特徴とする課題への集中機能と，自分自身の私的及び公的自己の側面に注意を向ける自己注目の機能という2

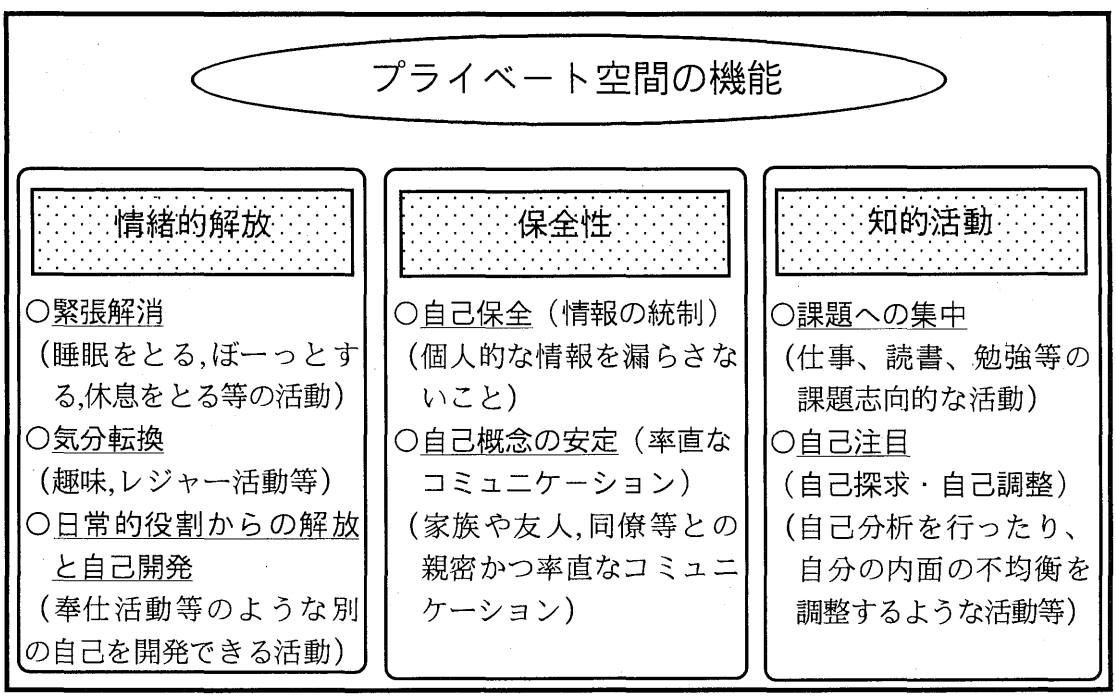

Fig. 1　プライベート空間の機能の分類(3機能7下位カテゴリー)

つの機能を含んでいる．なお，自己注目は自分自身を内省する自己探求機能と，将来の行動や自分の内的状態のバランスを回復するための自己調整という機能に細かく分類することも可能である．このように，概念的な類似性という観点から分類すると，プライベート空間は3機能7下位カテゴリーからなる機能で構成されていると考えられる．

そこで，次に，時・空間的なプライバシーに限定して，これらの諸機能間の有機的な関連性について示した仮説的モデルがFig. 2である．Fig. 2のモデルは，プライベート空間の機能に関する従来の知見を整理して，Laufer & Wolfe(1977)の示したプライバシー状況の3つの次元：「自己－自我次元」，「対人的次元」，「環境的次元」をヒントに，各プライベート空間を布置したものである．

Fig. 2より，プライベート空間は「自己－自我次元」，すなわち，自己認識や個人の自律性の発達に関する軸で捉えると，内発的な動機に基づく「気分転換」や「日常的役割からの解放と自己開発」は自我の働きが優勢になっていると考えるとEgo側に位置付けられ，「自己内省」のように客体としての自己が優勢になっていると考えるとSelf側に位置付けられると考えられる．次に，「対人的次元」で考えると，これは個人的か社会的かという軸のことを意味しているため，「自己内省」や「課題への集中」等のように個人的な活動に関するものはIndividual側に位置付けられる．一方で，「率直なコミュニケーション」，「気分転換」や「日常的役割からの解放と自己開発」は既存の人間関係のネットワークを維持・強化したり，あるいはまた，新たな人間関係のネットワークを形成する可能性が高いという点で，Social側の活動として位置付けられると考えられる．最後に，「環境的次元」で考えると，「自己内省」や「課題への集中」等のように他者や外界からの影響を遮断して注意の集中が要求される活動は，Indoor空間で行われやすいと考えられる．他

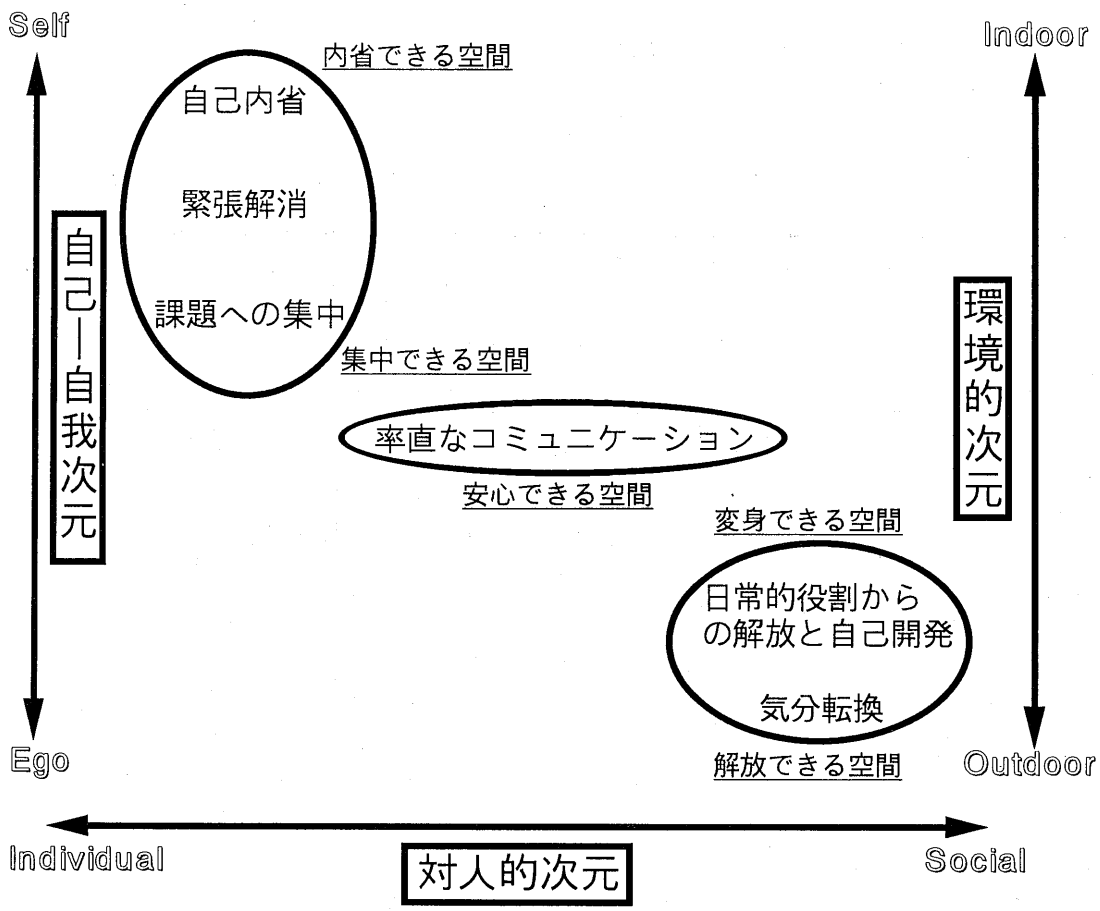

Fig. 2　プライベート空間の機能に関する仮説的モデル

方，「気分転換」や「日常的役割からの解放と自己開発」はIndoor空間で充足される場合よりはむしろ，職場や家庭等の日常生活の場を離脱したOutdoor空間を利用する場合の方が多いと考えられる．なお，「率直なコミュニケーション」機能は各次元に対してどちらか一方の側に位置付けられるよりは，どちら側にも移行する余地がある機能として位置付けた方がよいと考える．それ以外の機能もまた，機能の充足に適した空間はあるにせよ，所有できる空間や時間的な制約等によって代替的な空間で充足される可能性も考えられるため，固定的な位置付けではなく次元上を移行する余地を持つものとして捉えられる．

また，Fig.2における下位カテゴリーの各機能が充たせる空間を心理的機能空間として捉えた場合，知的活動機能における“課題への集中”は「集中できる空間」となる．次に，“自己注目”は「内省できる空間」となる．さらに，保全性機能における“率直なコミュニケーション”は「安心できる空間」として捉えられる．最後に，情緒的解放機能における“緊張解消”と“気分転換”は「解放できる空間」となる．そして，“日常的役割からの解放と自己開発”は「変身できる空間」として考える．

こうして，上述した5つの心理的機能空間は個々人の活動目的や感情状態等に応じて，具体的な生活空間内の場所を利用しながら充足されていくのではないかと考えられる．仮に，もしこれらの5つの空間が階層的な構造をなしていると考えた場合，Fig.3-1とFig.3-2のような関係になることが想定される．すなわち，Fig.3-1より，必要度という観点から見ると，「安心できる空間」をベースに，「解放できる空間」，「集中できる空間」，「内省できる空間」，「変身できる空間」という関係で構造化されるのではないかと考えられる．まず，「安心できる空間」と「解放できる空間」は日常生活の中で抑制している自分の意見や感情を解放したり，心身の疲労を癒してエネルギーを充電するという意味で，最も基本的かつ必須の機能空間であると考えられる．次の「集中できる空間」と「内省できる空間」は，解決すべき課題や問題が生じた場合に必要性が生じると考えられることから，安心と解放の機能空間に比べて若干必要度が低下するのではないかと考えられる．また，「変身できる空間」は，自分をより向上させたい時や日常生活に変化をつけたい時などに必要性が生じると考えられるため，他の機能空間ほど必要性は高くないと想定される．そして，Fig.3-2より空間確保の実現度という観点で考えると，「安心できる空間」と「解放できる空間」をベースに「内省できる空間」と「集中できる空間」が位置づき，そして最後に「変身できる空間」が位置づくと考えられる．実現度の場合，必要度の心理的機能空間とほぼ対応する形で空間が階層化されると考えられる．ただし，ある特定の場を確保することで複数の機能が充足される可能性があるという点と，現実の制約によって各機能空間の位置づけが変動しやすい可能性があるという点で，各機能空間相互の境界が必要度ほどには細分化できないと考えられる．すなわち，これらの階層的関係は各人のライフスタイルや物理的・心理的条件等によって，順序が入れ替わる可能性があることを付言しておきたい．また，その一方で，これらの空間は順序よく階層的に構造化されるというよりも，むしろ相互補完的な関係で充足されていく機能として考えるのが妥当ではないかとも思われる．なぜなら，ある機能空間が充足されないことが，そのまま他の機能空間の充足にまで影響するというような関係があるとは，

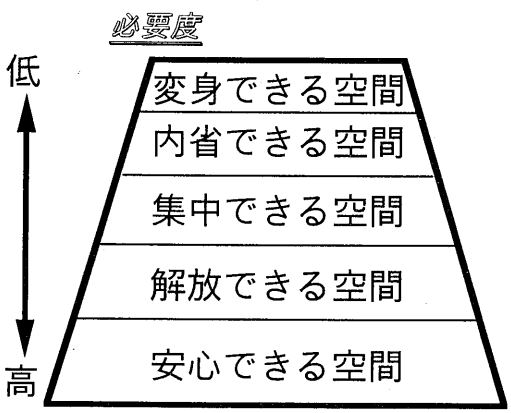

Fig. 3-1 必要度の観点から見たプライベート空間の構造

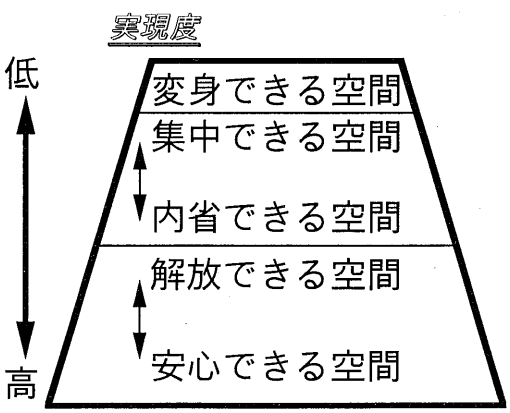

Fig. 3-2 実現度の観点から見たプライベート空間の構造

必ずしも言えないからである．したがって，こうした問題も含めて今後の課題としては，本稿において提出されたモデルについて，各機能間の相互関係や，具体的な生活空間との対応関係，さらには生活感情とプライベート空間利用との関係などについて，実証的に検討していくことである．

要　約

プライバシーに関する心理学的研究は，プライバシー志向性の測定を中心に行われてきたが，本邦ではあまり研究が進展していない．本稿では，従来のプライバシー志向性研究からの脱却を図るべくプライバシーを「生活空間の中に自分固有の領域を拡げていくこと」であるという観点から捉える．すなわち，本稿ではこのような領域をプライベート空間と呼び，プライベート空間の確保が持つ機能に焦点を当てて検討する立場に立っている．

まず，1．では，プライバシー研究の意義について述べた．次に，2．では先行研究を概観し，プライベート空間には，「独居」「自由意志」「友人との親密性」「遠慮期待」「家族との親密性」「閑居」「隔離」という7つの状況があることが明らかにされている(吉田・溝上，1996)が，これらの状況が相互にどのような関係を成し，かつ具体的にどのような生活空間の場や文脈で実現されているのかに関しては，従来ほとんど検討されてこなかったことを指摘した．

そこで，3．では，プライバシーないしプライベート空間の確保が持つ機能について，Westin (1967)のプライバシー論やレジャー研究，プライバシー剥奪状況の研究やその他のプライバシー研究等からの知見を概観した．また，近年では，Pedersen (1997)がプライベート空間の機能について直接的に検討しているが，包括的にプライベート空間の機能を整理できていないことから，プライベート空間の機能を包括的に整理・分類する必要性があることを指摘した．

そこで，4．ではプライベート空間の機能を包括的に整理・分類するモデルの提出に向けた調査の報告を行った．その調査では，プライベート空間確保の目的や機能について自由記述調査を行い，その結果をＫＪ法によって分類し整理した．そして，5．では，この調査結果と従来のプライベート空間の機能に関する知見を参考にして，プライベート空間の機能に関するモデルを異なる観点から整理した．それが，Fig.1からFig.3-2である．最後に，各Fig.に示したプライベート空間の機能に関して，生活空間との対応関係や機能間の相互関係について若干の考察を加え，今後の検討課題を示唆した．

引　用　文　献

Altman,I. 1975 *The Environment and Social Behavior.* Monterey, California: Brooks Cole.

Altman,I. 1976 Privacy : a conceptual analysis. *Environment & Behavior,* **8**, 7-29.

Altman,I. 1977 Privacy regulation : culturally universal or culturally specific. *Journal of Social Issues,* **33**, 66-84.

Altman,I., & Chemers,M. 1980 *Culture and environment.* Cambridge: Cambridge University Press.

Altman,I., & Haythorn,W.W. 1967 The ecology of isolated groups. *Behavioral Science,* **12**, 169-182.

Altman,I.,Taylor,D.A., & Wheeler, L. 1971 Ecological aspects of group behavior in social isolation. *Journal of Applied Social Psychology,* **1**, 76-100.

Bates,A.P. 1964 Privacy-A useful concepts? *Social Forces,* **42**, 429-434.

Berscheid,E. 1977 Privacy : A hidden variable in experimental social psychology. *Journal of Social Issues,* **33**, 85-101.

Block,L.K., & Stokes,G.S. 1989 Performance and satisfaction in private versus nonprivate work settings. *Environment & Behavior,* **21**, 227-297.

Brown,B.B. 1992 The ecology of privacy and mood in a shared living groups. *Journal of Environmental Psychology,* **12**, 5-20.

コーエン S.・テイラー L. 石黒毅(訳) 1984 離脱の試み－日常生活への抵抗－ 法政大学出版局 (Cohen,S., & Taylor,L. 1976 *Escape attempts : The theory and practice of resistance to everyday life.* London: Penguin Books Ltd.)

Collette,J. 1984 Role demands, privacy and psychological well-being. *International Journal of Social Psychiatry,* **30**, 222-230.

Craddock,A.E. 1997 The measurement of privacy preferences within marital relationships : The relationship privacy preference scale. *The American Journal of Family Therapy,* **25**, 48-54.

Crouch,A., & Nimran,U. 1989 Perceived facilitators and inhibitors of work performance in an office environment. *Environment & Behavior,* **21**, 206-226.

Derlega,V.J., & Chaikin,A.J. 1977 Privacy and self-disclosure in social relationships. *Journal of*

Social Issues, **33**, 102-115.

Duvall,D., & Booth,A. 1978 The housing environment and women's health. *Journal of Health & Social Behavior*, **19**, 410-417.

Duvall-Early,K., & Benedict,J.O. 1992 The relationships between privacy and different components of job satisfaction. *Environment & Behavior*, **24**, 670-679.

Edney,J.J., & Buda,M.A. 1976 Distinguishing territoriality and privacy : two studies. *Human Ecology*, **4**, 283-296.

Esser,A.H. 1976 Theoretical and empirical issues with regard to privacy, territoriality,personal space and crowding. *Environment & Behavior*, **8**, 117-124.

Foddy,W.H. 1984 A critical evaluation of Altman's definition of privacy as a dialectical process. *Journal for the Theory of Social Behavior*, **14**, 297-307.

Francis,C., & Cooper,C. 1991 Places people take their problems. In J,Urbina-Soria(Ed.), Healthy environments. *Proceedings of the Twenty-second Annual Conference of the Environmental Design Research Association*. Oaxtepec, Mexico. Pp. 178-184.

Goffman, E. 1959 *The presentation of self in everyday life*. Anchor Books.

Gregor,T.A. 1970 Exposure and seclusion: A study of Institutionalized Isolation among the Mehinacu indians of Brazil. *Ethology*, **9**, 234-250.

Gregor,T.A. 1974 Publicity,privacy and Mehinacu marriage. *Ethology*, **13**, 333-349.

Haggard,L.M., & Werner,C.M. 1990 Situational Support,Privacy Regulation, and Stress. *Basic and Applied Social Psychology*, **11**, 313-337.

Hammitt,W.E. 1982 Cognitive dimensions of wilderness solitude. *Environment & Behavior*, **14**, 478-493.

Hammitt,W.E., & Brown,G.F. 1984 Functions of privacy in wilderness environment. *Leisure Sciences*, **6**, 151-166.

Harris,P.B., Werner,C.M., Brown,B.B., & Ingebritsen,D. 1995 Relocation and privacy regulation : A cross-cultural analysis. *Journal of Environmental Psychology*, **15**, 311-320.

Harrison,A.A.,Sommer,R.,Struthers,N., & Hoyt,K. 1986 *Implications of privacy needs and interpersonal distancing mechanisms for space station design* (NASA NAG2-357). Washington,D.C.: National Aeronautics and Space Administration.

Harrison,A.A.,Caldwell,B.,Struthers,N., & Clearwater,Y.A. 1988 *Incorporation of privacy elements in space station design* (NASA NAG 2-431). Washington,D.C.: National Aeronautics and Space Administration.

Harrison,A.A., & Connors,M.M. 1990 Human factors in spacecraft design. *Journal of Spacecrafts and Rockets*, **27**, 478-481.

Hunter,M.,Grinnell,R.M., & Blanchard,R. 1978 A Test of shorter privacy preference scale. *The Journal of Psychology*, **98**, 207-210.

岩田　紀　1987　日本人大学生におけるプライバシー志向性と人格特性との関係．社会心理学研究，**3**，11-16.

Iwata,O. 1988 Similarities and dissimilarities in the Japanese semantic structure of privacy and its associated concepts. *Psychologia*, **31**, 198-206.

片桐雅隆　1996 プライバシーの社会学-相互行為・自己・プライバシー　世界思想社

Kelvin, P. 1973 A social psychological examination of privacy. *British Journal of Social & Clinical Psychology*, **12**, 248-261.

建築学大系編集委員会編　1978　建築学大系 27 集団住宅　彰国社　Pp.226-229.

北浦かほる　1988　子供の個室保有が自立の発達と家族生活に及ぼす影響(2)－日米比較研究－　住宅総合研究財団研究年報，**15**，173-193.

北浦かほる・西岡智美・木村悦子・萩原美智子・若井富美代　1991　子供のプライベートプレイスに関する研究(1)－(3)　日本建築学会大会学術講演梗概集，145-150.

Korpela,K.M. 1989 Place-Identity as a product of environmental-self regulation. *Journal of Environmental Psychology*, **9**, 241-256.

Korpela,K.M. 1991 Are favorite places restorative environments ? In J,Urbina-Soria(Ed.), Healthy environments. *Proceedings of the Twenty-second Annual Conference of the Environmental Design Research Association*. Oaxtepec, Mexico. Pp. 371-377.

Korpela,K.M. 1992 Adolescents' favourite places and environmental self-regulation. *Journal of Environmental Psychology*, **12**, 249-258.

Laufer,R.S., & Wolfe,M. 1977 Privacy as a concept and a social issue : A multidimensional developmental theory. *Journal of Social Issues*, **33**, 22-44.

Margulis,S.T. 1977 Conceptions of privacy : current status and next steps. *Journal of Social Issues*, **33**, 5-21.

Marshall,N.J. 1972 Privacy and Environment. *Human Ecology*, **1**, 93-110.

Marshall,N.J. 1974 Dimensions of privacy preferences. *Multivariate Behavioral Research*, **9**, 255-272.

三戸 公 1976 公と私 未来社

三輪正弘・大澤良二 1979 基本設計・実施設計 清家清(編) 住宅設計ハンドブック オーム社 Pp.578-579.

Mocellin,J.S.,Suedfeld,P.,Bernadelz,J.P., & Barbarito, M.E. 1991 Level of Anxiety in Polar Environments. *Journal of Environmental Psychology*, **11**, 265-275.

Moore,B.J. 1984 *Privacy : Studies in social and cultural history*. New York: Armonk.

森田洋司 1991 私事化社会の不登校問題ープライベートスペース理論の構築に向けてー 教育社会学研究, 第49集, 79-93.

森田洋司 1993 私事化社会におけるプライベート・スペースの再構築に向けて 大阪市立大学文学部紀要 人文研究, **45**, 39-64.

村上孝止 1996 プライバシーＶＳマスメディア 学陽書房

中島喜代子 1993 子ども部屋に関する研究(その1)ー子ども部屋の空間条件に影響を与える要因ー 三重大学教育学部研究紀要, **44**, 81-93.

中島喜代子 1994 子ども部屋に関する研究(その2)ー子ども部屋が子どもに与える影響ー 三重大学教育学部研究紀要, **45**, 125-134.

Newell,P.B. 1994 A systems model of privacy. *Journal of Environmental Psychology*, **14**, 65-78.

Newell,P.B. 1995 Perspectives on privacy. *Journal of Environmental Psychology*, **15**, 87-104.

O'Neill,M.J. 1994 Work space adjustability,storage, and enclosure as predictors of employee reactions and performance. *Environment & Behavior*, **26**, 504-526.

Palinkas,L.A. 1990 Psychological Effects of Adjustment in Antarctica : Lessons for Long-Duration Spaceflight. *Journal of Spacecrafts and Rockets*, **27**, 471-477.

Pastalan,L. 1970 Privacy as a behavioral concept. *Social Science*, **45**, 93-97.

Patterson,A.H., & Chiswick,N.R. 1981 The role of the social and physical environment in privacy maintenance among the Iban of Borneo. *Journal of Environmetal Psychology*, **1**, 131-139.

Pedersen,D.M. 1979 Dimensions of privacy. *Perceptual and Motor Skills*, **48**, 1291-1297.

Pedersen,D.M. 1982b Personality correlates of privacy. *The Journal of Psychology*, **112**, 11-14.

Pedersen,D.M. 1987a Relationship of personality to privacy preferences. *Journal of Social Behavior and Personality*, **2**, 267-274.

Pedersen,D.M. 1987b Sex differences in privacy preferences. *Perceptual and Motor Skills*, **64**, 1239-1242.

Pedersen,D.M. 1988 Correlates of privacy regulation. *Perceptual and Motor Skills*, **66**, 595-601.

Pedersen,D.M., & Frances,S. 1990 Regional differences in privacy preferences. *Psychological Reports*, **66**, 731-736.

Pedersen,D.M. 1994 Privacy preference and classroom seat selection. *Social Behavior and Personality*, **22**, 393-398.

Pedersen,D.M. 1997 Psychological functions of privacy. *Journal of Environmental psychology*, **17**, 147-156.

Priest,S., & Bugg,R. 1991 Functions of privacy in Australian wilderness environments. *Leisure Sciences*, **13**, 247-255.

リースマン D. 加藤秀俊(訳) 1964 孤独な群衆 みすず書房
(Riesman,D. 1961 *The Lonely crowd: A study of the changing American character*. New Haven: Yale University Press.)

Rustemli,A. & Kokdemir,D. 1993 Privacy dimensions and preferences among Turkish students. *The Journal of Social Psychology*, **133**, 807-814.

Schwartz,B. 1968 The social psychology of privacy. *American Journal of Sociology*, **73**, 741-752.

ソマー, R. 穐山貞登(訳) 1972 人間の空間 鹿島出版会
(Sommer, R. 1969 *Personal space: The behavioral basis of design*. New York: Prentice-Hall.)

Stone,D.L. 1986 Relationship between introversion / extraversion, values regarding control over information, and perceptions of invasion of privacy. *Perceptual and Motor Skills*, **62**, 371-376.

Stone,E.F.,Gueutal,H.G.,Gardner,D.G., & McClure,S. 1983 A field experiment comparing Information-Privacy values,beliefs,and attitudes across several types of organizations. *Journal of Applied Psychology*, **68**, 459-468.

Sundstrom,E.,Town,J.,Brown,D.,Forman,A., & McGee, C. 1982a Physical enclosure,type of job,and privacy in the office. *Environment & Behavior*, **14**, 543-559.

Taylor,D.A.,Wheeler,L.,& Altman,I. 1968 Stress reactions in socially isolated groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 369-376.

Taylor,R.B., & Ferguson,G. 1980 Solitude and intimacy : Linking territoriality and privacy experiences. *Journal of Nonverbal Behavior*, **4**, 227-239.

Traver,H. 1984 Orientations toward privacy in Hong Kong. *Perceptual and Motor Skills*, **53**, 635-644.

Tolchinsky,P.D.,McCuddy,M.K.,Adams,J.,Ganster,D.C., Woodman,R.W., & Fromkin,H.L. 1981 Employee perceptions of invasion of privacy : A field simulation experiment. *Journal of Applied Psychology*, **66**, 308-313.

泊　真児・吉田富二雄　1997　プライバシー空間の機能的分析と心理的意味　日本社会心理学会第38回大会発表論文集，60-61.

Vinsel,A.,Brown,B.B.,Altman,I., & Foss,C. 1980 Privacy regulation,territorial displays,and effectiveness of individual functioning. *Journal of Personality & Social Psychology*, **39**, 1104-1115.

Warren,S.D., & Brandeis,L.D. 1890 The right to privacy. *The Harvard Law Review*, **4**, 193-220.

Warren,C., & Laslett,B. 1977 Privacy and secrecy : A conceptual comparison. *Journal of Social Issues*, **3**, 43-51.

Webb,S.D. 1978 Privacy and psychosomatic stress : An empirical analysis. *Social Behavior & Personality*, **6**, 227-234.

Weinstein,C.S. 1982 Privacy-seeking Behavior in an elementary classroom. *Journal of Environmental Psychology*, **2**, 23-25.

Weiss,A.G. 1987 Privacy and intimacy. *Journal of Humanistic Psychology*, **27**, 118-125.

Werner,C.M., & Haggard,L.M. 1992 Avoiding Intrusions at the office : Privacy regulation on typical and high solitude days. *Basic and Applied Social Psychology*, **13**, 181-193.

Westin,A.F. 1967 *Privacy and Freedom*. New York: Atheneum.

安永寿延　1976　日本における「公」と「私」日本経済新聞社

吉田圭吾・溝上慎一　1996　プライバシー志向性尺度(本邦版)に関する検討　心理学研究，**67**，50-55.

—1997．9．30 受稿—

付録1　岩田(1987)によるプライバシー志向性尺度(3因子－13項目)

項目番号と項目名	因子1	因子2	因子3
第1因子：独居志向			
1．1人でいることのできる時間や空間は私にとって貴重である	.533	.097	.265
2．他人や家族の目を気にせずにくつろげる時間や空間が欲しい	.564	-.313	.073
3．自分1人の世界を築くことができる個室が欲しい	.501	-.008	.301
4．1人になりたい時や親しい人と2人きりでいたい時にはいつでもそうできることを望む	.459	-.279	.011
5．自分の部屋で一人になると心の安らぎを得られるので好きである	.589	-.097	.108
6．他人の干渉を受けずに自由に行動できる状態を必要な時に確保することは重要である	.484	-.353	.066
7．他人に邪魔されずに自分の意志で自由に行動したい	.502	-.033	.189
第2因子：精神生活の非公開志向			
8．知られたくない私生活の部分はできるだけ隠したい	.155	-.772	.246
9．知られたくない悩みや心の傷はできるだけ隠したい	.020	-.777	.262
第3因子：病気・身体的欠陥の非公開志向			
10．家庭内の知られたくないことは親しい人にも隠して置く	-.040	-.251	.564
11．自分の劣等感はできるだけ他人に知られないようにする	.118	-.190	.443
12．自分の真実の心を表した日記や手紙は人目に触れないようにする	.136	-.088	.561
13．知られたくない病気や身体的欠陥はできるだけ隠す	.137	.028	.644

注：岩田(1987)によるプライバシー概念の定義「プライバシーとは，自己あるいは個人が集団への接近に対して，選択的な統制を行使している状態なのである．」

付録2　吉田・溝上(1996)によるプライバシー志向性尺度(7因子－21項目)

項目番号と項目名	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7
第1因子：独居							
1．私は，1人で自分の部屋にいるのが好きである．	.877	.013	-.046	.089	.006	.118	-.013
2．自分の部屋で1人になると心の安らぎが得られるので好きである．	.865	.131	.022	-.029	-.014	.099	-.009
3．1人でいることのできる時間や空間は，私にとって貴重である．	.785	.140	.115	.041	.051	-.026	.089
第2因子：自由意志							
4．他人に邪魔されずに自分の意志で自由に行動したい．	.094	.776	.101	.008	.014	.157	.062
5．自分のやりたいことを他人に気がねなくやりたい．	.135	.768	.132	.023	-.132	.009	-.074
6．他人に迷惑をかけなければ，いかなる行動をしようと私の自由である．	.035	.765	-.140	.075	-.179	.009	.059
第3因子：友人との親密性							
7．私にとって，自分のことを何でも話せる人がいることは大切であり，その人には私の最も深い個人的な考えや感情も知ってほしいと思う．	.018	-.004	.827	-.121	.018	.037	.025
8．自分の大切な秘密を打ち明けても，その秘密を口外しないでいてくれる友人をもつことは，私にとって大変重要である．	.051	.080	.790	.148	.036	-0.70	-.033
9．私は，自分が落ち込んでいるときに，友人が共感してくれて，私を元気づけてくれるとうれしい．	.016	.003	.746	-.143	.132	-.183	-.095
第4因子：遠慮期待							
10．私は，あまりよく知らない人に自分のプライベートな事柄についてしゃべることは普通しない．	.125	-.076	-.019	.825	-.068	-.163	.002
11．私は，ぶしつけで個人的な質問をされるのは好まない。	-.148	-.007	-.003	.792	.093	.167	.000
12．私は，長い間付き合うまで個人的なことを友達と話し合うのを好まない．	.124	.189	-.091	.760	.114	-.012	.001
第5因子：家族との親密性							
13．私は，家族のメンバーだけで一緒に行動するのが好きである．	-.101	-.178	-.023	-.009	.799	-.069	.221
14．家族にとって，友人や親戚から離れて家族のメンバーだけで一緒に過ごせる時間をもつことは大切である．	.167	-.078	.158	.033	.710	.029	-.049
15．私は，家で家族と一緒に楽しんでいるときに他から邪魔が入ってほしくない．	-.035	-.046	.040	.100	.700	.053	-.144
第6因子：閑居							
16．家をもつとすれば，声を限りに叫ばない限り隣には聞こえないくらい隣家から十分に離れているほうがよい．	-.023	.093	-.036	.036	.010	.817	-.088
17．私は，他の家の視界から外れた人目につかないような家に住みたい．	.086	-.064	-.076	-.004	.028	.785	.208
18．私は，自分の許可無しには誰にも入られないようなプライベートな隠れ家がほしい．	.206	.312	-.115	-.076	-.014	.545	.200
第7因子：隔離							
19．私は，山小屋経営のような仕事もしてみたいなと思う．	-.157	-.118	.072	.063	-.235	.042	.767
20．私は，夏の間，自分1人で野山を散策してみたいと思う．	.121	.239	-.038	-.093	.266	-.028	.722
21．私にとって，森の別荘でまったく1人で暮らすのはどんなに楽しいことだろう．	.148	-.008	-.182	.032	-.027	.344	.675

注：吉田・溝上(1996)によるプライバシーの定義「プライバシー欲求とは，個人が，社会参加のストレスから開放されたり，社会参加による洪水のような情報を評価したりする時間・空間を求めることである．」